

博士論文（要約）

ナショナル・ランドスケープ
焼跡と闇市——国民的地景と占領期の空
間表象

逆井 聡人

【章立て】

序章

第1部 〈焼跡〉・〈闇市〉のイメージ編成

- 第1章 映される焼跡と語られない〈焼跡〉—戦後日本映画批評と焼跡表象
- 第2章 戦災復興と闇市—『20年後の東京』と『野良犬』にみる闇市の役割—
- 第3章 闇市とレイシズム—闇市の構造と取り締まりにおける対象の変遷
- 第4章 物語のなかの闇市
- 第5章 原罪に代わるもの—戦後道徳と荒正人

第2部 戦後日本から冷戦期日本へ—ナショナル・ランドスケープ国民的地景と異郷—

- 第6章 田村泰次郎「肉体の門」論——「新生」の物語と残余としての身体
- 第7章 〈焼跡〉が〈闇市〉を周縁化する—石川淳「焼跡のイエス」論
- 第8章 宮本百合子「播州平野」をめぐる「戦後」の陥穽
- 第9章 金達寿「八・一五以後」における「異郷」の空間表象
- 第10章 生活のための闘争—民族教育と濁酒

終章

【要約】

研究の目的

本研究は、アジア太平洋戦争直後の日本における空間イメージを分析することを通して、「戦後日本」の基礎として形成された〈焼跡〉というナショナル・ランドスケープ国民的地景とそれを解体する〈闇市〉的空間を弁別し、その〈焼跡〉と〈闇市〉の相剋を考察することを目的とする。本研究の主な対象は、連合軍による占領期（1945～1952年）において発表された日本人作家、及び朝鮮人作家による文学作品を中心に、加えて映画作品や戦後思想、そして都市計画も考察の対象として取り上げる。

先行研究とその問題点

これまで占領期日本の文化を対象とする研究は、歴史学や社会学、文学等様々な分野において行われてきた。そして多くの研究が敗戦直後の社会を「戦後」の始まりの空間として、その初発性を強調して論じてきた。しかしながら「戦後」という時代区分を用いて敗戦直後の社会の初発性を強調することは、それ以前の歴史と断絶したものとしてその時期の事象を捉えることに繋がる。特に敗戦後の社会において代表的とされる様々な事象、例えば闇市や街娼、浮浪児、引揚者、復員兵といった問題の原因は戦前・戦時に見出せるにもかかわらず、その連続性よりも断絶性が殊更強く押し出されることが多かった。

こうした「戦後」という歴史認識が孕む問題性は1990年代末から歴史研究の分野で議論されるようになった。これらの研究の中で、「戦後」を歴史の断絶として捉えることは、アジア太平洋戦争以後も解決せずに残っている植民地支配や戦時暴力の問題を見え難くし、日本を取り巻く国際問題の重心を米国との関係性だけに置く傾向を生み出してきたことが指摘されている。より具体的には、在日朝鮮人や従軍慰安婦、そして沖縄の基地などの問題が、今日まで未解決のまま存続してきたことの理由として、対米重視の「戦後」政治の有り様を取り上げられてきた。そのために2000年代には特に戦後政治の基礎がつくられた占領期という時代に注目が集まるようになった。文学研究や映画研究においても、従来の「戦後」という歴史認識を前提とした解釈の枠組みが見直され、ジェンダー批評やポストコロニアル批評の視点からの読み直しが進んできており、本研究はこの潮流の中に位置付けられる。

一方で占領期の都市空間を対象にした表象研究は、上のような研究の成果を踏まえたものが未だ提出されていない。1980年代に隆盛した都市論は、都市をテキストとして読むことを試みたが、そ

の対象は明治・大正・昭和初期といったいわゆる戦前期の都市を扱ったものが多く、戦時中から戦後へ到る時期が十分に考察されたことはなかった。現在においても都市をめぐる表象研究は戦前期が依然として中心である。ジェンダー／ポストコロニアル批評といった観点を取り込んだ占領期の都市表象研究は、十分議論の余地があり、「戦後日本」の再考に重要な視点をもたらすものである。

議論の枠組みと内容

本研究は空間表象の観点から「戦後日本」という時代認識をめぐる問題を解決するための方策として、「焼跡」と「闇市」という二つのキーワードに注目する。焼跡とは、具体的には米国を中心とした連合軍による戦略的爆撃とそれによる火災で破壊された日本の都市部の被害箇所を示す。焼跡の光景は、人々に日本という帝国の崩壊をまざまざと思い知らせると同時に、この光景が日本という国の被害者としての側面を象徴するものとして作用してきた。さらにこの連合軍による被害は総力戦体制からの解放と新しい日本社会をもたらすための基礎としても理解され「日本の再生」を強調する記号として用いられてきた。つまり、〈焼跡〉という記号は、荒廃した都市のイメージを媒介に、日本の被害者性と「戦後日本」の起源を意味するものとして機能するということである。

一方闇市は、日本敗戦の直後から列島の各都市に出現し始め、度々遅延する政府からの配給では賄いきれない人々の日々の糧を非合法ながらも提供する、一種の民間セイフティー・ネットとして機能した。また、闇市には公定価格を度外視する法外な値段を強いる悪徳の温床としての一面もあり、長らく敗戦直後の日本社会や民衆生活の「不道德」や「混乱」状況を表す否定的な現象としても語られてきた。しかし同時に、その混沌が人々のエネルギーの発露として逆説的に評価される場合もあった。つまり闇市という空間は「敗戦後の混沌」のなかの「民衆のエネルギー」の象徴として位置付けられ、そしてそれもまた「戦後日本」を生み出す土壌〈闇市〉として記号化されてきたと言えるであろう。

このように〈焼跡〉は被害者性を、〈闇市〉は混沌の中のエネルギーを、それぞれ含意としながら共に「戦後日本」の始まりを刻印する記号として認識されてきた。そして敗戦直後の社会を論じる際には「焼跡闇市時代」といったように焼跡と闇市という単語はそれぞれ区別されることなく一括りにして語られてきた。「敗戦直後の混沌と無秩序という“祝祭的空間”」とこの時期の文学的イメージが持つ共通の空間認識を言い表したのは川村湊であるが、まさにこのような認識こそが「戦後日本の誕生」という神話を仮構するための下地となったと言えるであろう。

このような従来の認識に対して本研究が行うのは、〈焼跡〉と〈闇市〉をあえて切り離し、それぞれが対立する空間イメージを持ったものとして論じることである。キャロル・グラックは戦後日本のナショナル・ヒストリーを構成する物語に次の三要素を見出す。すなわち「歴史の断絶・切り離された過去・新たな始まり」という三つの要素が「戦後」という歴史認識を仮構したと論じた。これら三要素に照らし合わせてみると、〈焼跡〉が示す被害者性というのは、植民地支配／侵略戦争という加害者としての過去を「断絶」し「切り離す」ことによって成立する。そして、そのことによって「新しい日本」を仮構するために、まさに「戦後」という物語の構成要素は、そのまま〈焼跡〉という記号の中に集約されるといえるであろう。

一方で〈闇市〉という記号に含意されたのは、民衆のエネルギーであり、それは規制の道徳観や国家観に対する人々のカウンター・カルチャーであった。この場合、前提となるのは「抑圧されてきた民衆」という過去から継続した存在であり、歴史の連続性を強調する。これは断絶を必要とする〈焼跡〉とはベクトルが正反対の志向を持つ。80年代の闇市再評価の際に用いられた「解放区」というレトリックも、その前提として民衆を圧迫してきた国家という存在が置かれていた。そのような言辞を鑑みるならば、〈焼跡〉という記号が国家的な物語の土壌であり、〈闇市〉という記号は本来的にそれに対峙するはずである。しかしながら、〈闇市〉という

記号もまた「戦後」という歴史認識の一場面として記憶されていることは先に見た通りである。民衆のエネルギーはそのまま日本人のものとして国籍を与えられ、「戦後日本」復興のエネルギー源として語られてきた。この本来対立するはずの二つの記号を共存させる——加害の過去だけを断絶して、被害の記憶だけを継続させるためには、何らかの操作が必要になるはずである。それはどんなものだったのか。なぜ〈闇市〉という空間がナショナル・ヒストリーの起源の舞台、すなわち国民的地景ナショナル・ランドスケープに取り込まれることになるのか。この問いが本研究の中心的議論となる。

その問題を解決するために本研究では山口昌男の中心—周縁理論を参照する。山口の中心—周縁理論は神話（物語）生成のメカニズムを中心（秩序概念）と周縁（混沌）の対の運動として捉える。すなわち中心の秩序は常に混沌の存在を必要とし、そしてその境界の空間は両義的性格を持ち、それはしばしば再度周縁化される空間でもある。この両義性にこそ秩序の物語発生の契機があると論じる。つまり中心—周縁理論は、周縁性自体が中心を支える物語に収奪されるような排除と囲い込みの構図に自覚的であった。

しかし、従来の闇市評価に見る祝祭性・非日常性・価値転倒性の評価は、実のところそうした囲い込みの構造を見過ごしており、周縁性が生み出すアジールにユートピアを見出すようなナイーブさがあり、結果的に中心（〈焼跡〉）の物語を補完することになってしまった。まさに〈闇市〉が周縁として〈焼跡〉という中心に従属させられることによって秩序の物語としての「戦後日本」が発動するような力学をみることができると言える。

闇市が登場する文学や映画作品に対してこれまでの解釈の大多数が、この罫にはまり込んできた。闇市を評価することで、戦後社会の多様性や異種混濁性を見出そうとする議論は、結局のところ〈焼跡〉の論理に取り込まれて、「戦後」という概念を補強する読解に繋がっていった。そしてこれは闇市の話だけではなく、権力の周縁に多様性や異種混濁性を指摘し、評価しようとする議論の多くが同じアポリアを抱えていると言えるだろう。

本研究においてとりわけ重要視する在日朝鮮人文学やその背景にある民族運動をめぐる従来の議論にも、闇市に周縁性（祝祭性、多様性、異種混濁性）を付与する議論と同様の論理を見出すことができる。占領期日本における朝鮮人作家の作品は、これまで在日朝鮮人文学、あるいは在日朝鮮人研究という枠組みの中で半ば孤立して論じられてきた傾向がある。そして在日朝鮮人文学を下位分類としてそのまま「戦後文学」という枠組みの中に投げ込み、日本文学の「収獲」（多様性・異種混濁性）として語ってしまうことになった。それは植民地主義における支配・被支配という枠組みを無意識的に踏襲してしまうことでもあり、中心としての〈焼跡〉の論理が隠し持つ歴史の忘却の暴力性を無意識に機能させることになる。

そのために本研究の後半においては、在日朝鮮人作家・金達寿の占領期日本を描いた小説を同時代の日本人の小説と同じ土俵に上げ、作品論的に分析を行う。そこで試みることは、日本民族中心の〈焼跡〉の物語には回収されない要素を拾い上げることであり、それらから紡ぎ出される物語空間を「戦後日本」の国民的地景ナショナル・ランドスケープの軀から解放することにある。

そしてここでも、〈闇市〉という空間が重要になる。〈闇市〉という空間はこれまで日本国内の社会現象として語られてきたが、実のところ〈闇市〉という空間の存在を規定する要素は戦後日本の領域内で収まるものではない。〈闇市〉とは帝国日本が崩壊した際に流動し始めた人々や物資、そして政策や思想の流れが再び冷戦構造の中に再編成されていくその折衝の過程に現れた空間である。つまり〈闇市〉という空間は必ずしも「戦後日本」の周縁ではない。

〈焼跡〉という国民的地景ナショナル・ランドスケープが〈闇市〉を中心—周縁の関係性に囲い込もうとすることは既に述べたが、実のところ〈闇市〉という空間にとっては〈焼跡〉が中心ではないのである。その中心を偽装した〈焼跡〉の向こうに別の大きな中心がある。それが冷戦構造を確立していく

アメリカによって行われた日本占領の実態である。その実態を薄々感じさせしめる〈闇市〉は「戦後日本」の「破れ穴」であると言えるだろう。本研究はそのような〈闇市〉像を改めて提示し、冷戦期東アジアという領域の一部として占領期日本を捉える。

以上のような問題設定の上で本研究では、敗戦直後の日本の空間を解釈するために用いられてきた日本民族中心の〈焼跡〉の論理を国民的地景^{ナショナル・ランドスケープ}として捉え、この国民的地景^{ナショナル・ランドスケープ}による〈闇市〉の囲い込みの力学を映画や文学作品から読み取っていく。一方で、〈闇市〉の表象をより綿密に検討することで「戦後」という一国的な歴史認識を支える空間イメージを解体し、朝鮮半島や中国大陸の旧植民地との結びつきの中で「戦後日本」に代替する空間として「冷戦期日本」という枠組みを提示することを目指す。

本研究の構成

本論は、2部構成になっており、それぞれに5章を充てて、全10章によって成り立っている。

まず第1部は、「〈焼跡〉・〈闇市〉のイメージ編成」と題し、敗戦直後における批評言説や現代までの闇市を扱った文学作品を概括的に検討することで、〈焼跡〉〈闇市〉イメージの全体像を状況論的に提示する。第1章と第2章では、変則的に映画作品及び映画批評を扱うが、これは実際の焼跡と闇市の映像を持った映画作品に対して「新しい日本」を読み取ろうとする批評的言説が解釈不全を起こしてしまう様子を示すためである。先にも述べたように焼跡と闇市はそもそも実存的な空間である。そこに〈焼跡〉と〈闇市〉という「新しい日本」の土壌となるような記号的解釈を施そうとすると、その実際の映像が明に示してしまう敗戦の諸要素が障害となってしまふ。この事態に直面するとき、批評はそこに映されている焼跡と闇市という現実を語らないこと、否定することを選択する。

第1章では、斎藤寅次郎監督『東京五人男』（1946年）と小津安二郎監督『長屋紳士録』（1947年）を扱い、映像に移った現実の都市空間とこれらに対する批評言説との齟齬を見出す。特に「長屋紳士録」において焼跡という背景を積極的に物語の読解に取り込む時、従来の解釈にはなかった物語の要素を見出すことになる。第2章においては、敗戦直後の都市空間自体がもっている問題を東京都都市計画課のPR映画である『20年後の東京』（1947）と黒澤明監督『野良犬』（1949年）を通して検討する。具体的には東京に焦点をあて、「民主的」と宣伝された戦災復興計画が帝国日本の植民地都市計画といかに連動しているかを確認する。そしてその復興計画の「新しさ」の偽装を暴くファクターとしての〈闇市〉という空間を考える。その上で、その〈闇市〉を映し出すことにこだわった黒澤明監督の『野良犬』（1949）という映画を通して、過去への通路としての〈闇市〉の有り様を考察する。

第3章は、「闇市」とは何か、という問いに答えるために、「闇市」という言葉が持つイメージが戦時期から占領期を通してどのように変遷していったかを、闇市の構造に触れながら検討していく。ここで重要視するのは、「闇市」という語の不道德性と外部性という二つの要素が何に対して付与されていたかということである。帝国が崩壊し、「戦後日本」へと国の形が変わっていく中で、「闇市」という空間がいかにその転換に関わっていくかを、行政や占領軍の闇市取り締まりの推移と共に考察する。そこで見えてくるのは、「日本人」という国家の構成員の範囲の変化である。

第4章では、現代までの敗戦直後の都市空間を描いた文学作品を〈闇市〉の描かれ方に焦点をあてながら概括的に検討する。特に「道徳」、「検閲」、「戦争の記憶」等の諸要素が作品の提出された同時代の出来事といかに連動しながら〈闇市〉像を形成しているかに焦点を当てる。第5章では、第3章、4章で言及した敗戦後の言説空間における「道義／道徳」という語がいかなる意味を持ったかを、文芸評論家荒正人の議論を通して考察する。日中戦争と共に強化さ

れていった道義を、戦後道徳はいかに乗り越えようとしたのか、そこに帝国日本の被害者に応答できる可能性はあったのか、という問いを中心に検討する。

第2部「戦後日本から冷戦期日本へ—国民的地景と異郷—」では、第1部で得た知見をもとに文学テキストの分析を試みる。第6章では、「肉体文学」の代表作である田村泰次郎の「肉体の門」(1947年)を扱い、「肉体」という概念がどのようなものとして構想されたか、そしてそれがテキストにおいていかに描き出されているかに注目する。特に占領期において女性の身体表象を通して「新生」を描くことの意味に注目する。第7章では、「戦後の焼跡闇市」を描いた代表作としてあげられてきた石川淳の小説「焼跡のイエス」を扱う。戦後日本の起源を描いたという従来の解釈に対抗して、この作品が国家としての「戦後日本」とは別の空間を描き、日本人でない人々を主題として描き出した可能性を考察する。その上で〈焼跡〉という国民的地景ナショナル・ランドスケープがいかにこの物語とその解釈を囲い込んできたのかを論じる。また従来の解釈が、女性の身体に国土を重ねるようなジェンダー観を前提として行われていたことを指摘し、「少年」に欲望する「私」を見出すことで代替的な作品解釈を試みる。

第8章では、宮本百合子の小説「播州平野」を扱う。この作品もまた戦後民主主義文学の代表作として第一に挙げられる小説であろう。しかし本章においてはそのような評価がいかなる政治的文脈から生まれてきたのかを確認しつつ、戦後民主主義がもつ植民地主義への無自覚さを作者及び焦点人物の朝鮮人描写から読み取る。その上で、当作品を「いたたまれなさ」の文学として捉え直し、再評価の可能性を探る。

第9章では、金達寿が「解放」直後の日本に在住していた朝鮮人の状況を小説化した「八・一五以後」(1947年)を論じる。この小説の中では闇市が小説の最初と最後に登場し、「解放」以後の在日朝鮮人の生活を強く規定する場として提示されているということを論じる。その上で、闇市で生計を立てることを余儀なくされた在日朝鮮人が、その空間から異郷である「戦後日本」を見つめ返す時、何を見出すのかを考える。

第10章では、在日朝鮮人たちが日本での生活を続けなければならないことが決定的になった状況下での、彼らの生活を描いた小説「番地のない部落」(1948年)や「四斗樽の婆さん」(1949年)等を論じる。ここでは、朝鮮戦争への緊張感が高まる中、日本内部において占領軍から朝鮮人が「共産主義の扇動者」として警戒されていたこと、また密造酒販売という闇市での生業を理由に弾圧が強められていたことを確認した上で、「濁酒」とそれを造る「お内儀さんたち」という金達寿の小説に頻出する表象から何を描き出そうとしていたのかを考察する。

終章において、改めて〈闇市〉という空間についての議論を、各章のまとめを行いながら整理する。その上で、〈闇市〉という問題を設定することから見えてくるアジア太平洋戦争後の日本という空間の国民的地景ナショナル・ランドスケープに支配されないイメージを提示することをもって、本論の結論とする。